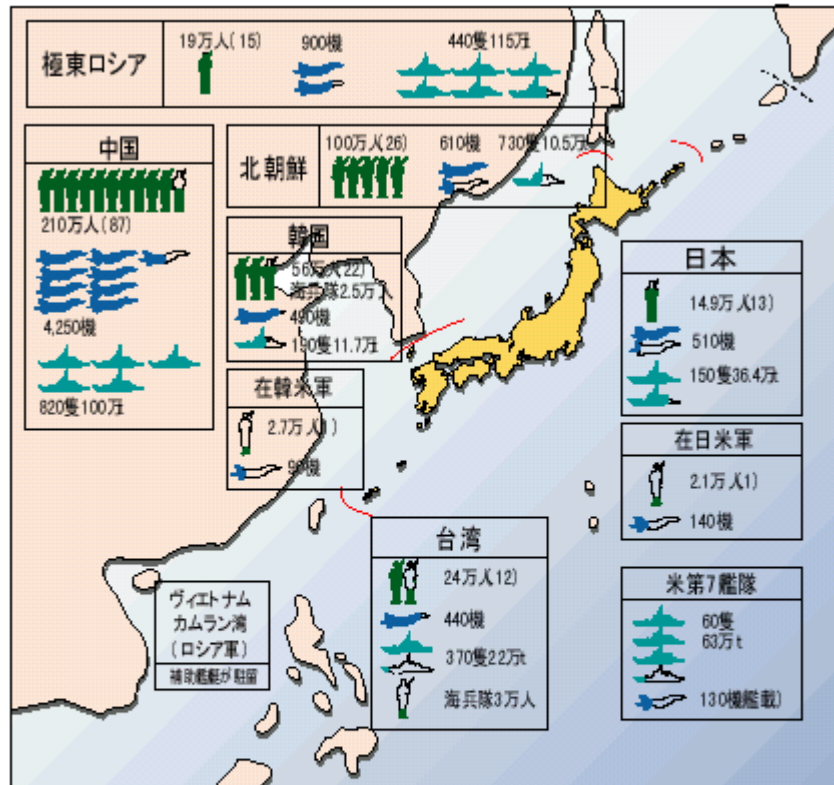


第4節 アジア太平洋地域の軍事情勢

1 全般情勢

冷戦終結後、アジア太平洋地域では極東ロシア軍の量的削減などの変化が見られるものの、依然として大規模な軍事力が存在する中で、多くの国々が経済力の拡大などに伴い軍事力の拡充・近代化に努めてきており、また、領土問題などが未解決のまま存在するなど、依然として不透明・不確実な要素が残る。

第1-5図 アジア太平洋地域における主な兵力の状況概数)



- (注)1 資料は、ミタリー・バランス(97～98)などによる(日本は97年度末実勢力)
 2 在日・在韓駐留米軍の陸上兵力は、陸軍及び海兵隊の総数を示す。
 3 カムラン湾ロシア軍の兵力は、極東ロシア兵力の内数である。
 4 作戦機については、海軍及び海兵隊機を含む。
 5 ()は、師団数を示す。

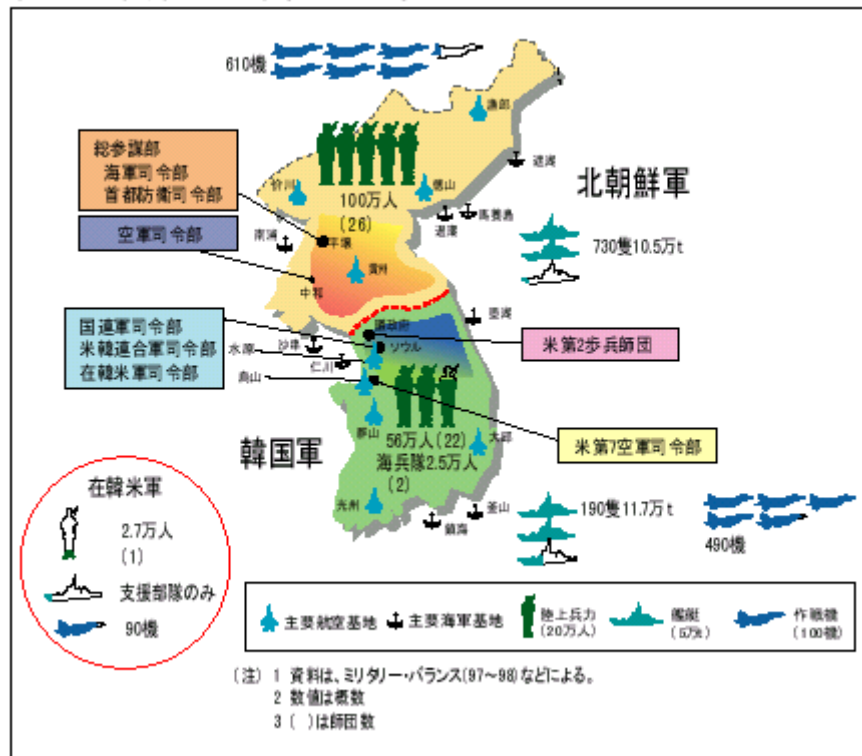


これに対して、この地域では、米国を中心とする二国間の同盟・友好関係とこれに基づく米軍の存在が地域の平和と安定に重要な役割を果たしているところであるが、近年、地域的な安全保障に関する対話の努力も見られる。

2 朝鮮半島

北朝鮮は、経済不振が深刻であるにもかかわらず、軍事力の近代化、即応体制の維持に努めており、その動向には引き続き細心の注意が必要である。

第1-6図 朝鮮半島の軍事力の対峙

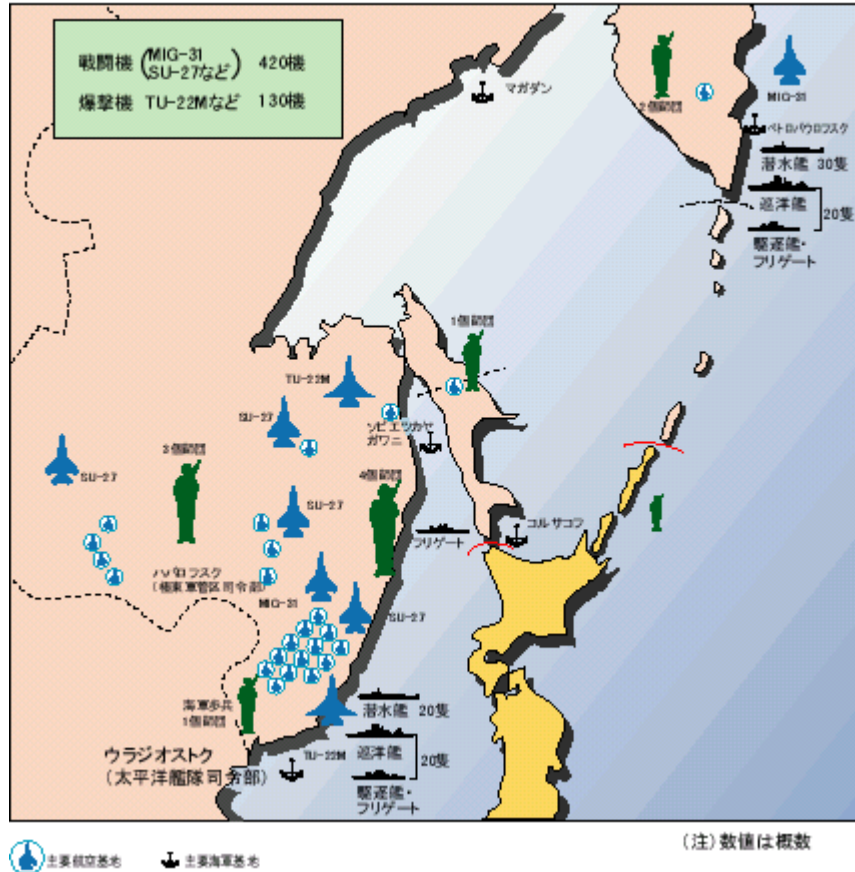


核兵器開発疑惑もあるため、ミサイル開発の動向が強く懸念されており、朝鮮半島での平和体制を追求する4者会合の今後の進展が注目される。

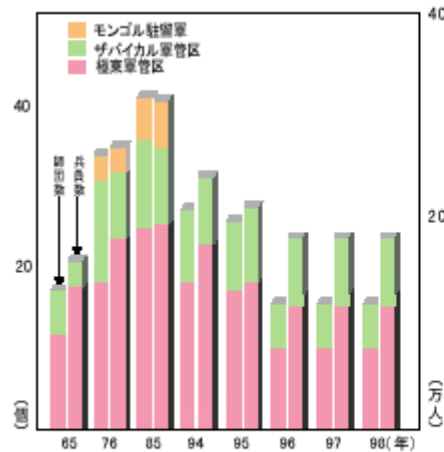
3 極東ロシア軍

極東ロシア軍は、依然として大規模かつ近代化された戦力が蓄積された状態にあり、その一部につき更新、近代化されている。他方で、その規模は縮小傾向にあり、訓練などの活動は依然として低調とみられている。

第1-7図 我が国に近接した地域における極東ロシア軍の配置

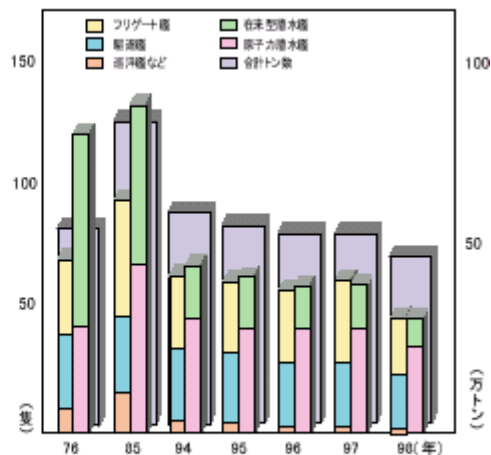


第1-8図 極東ロシア軍の地上兵力の推移

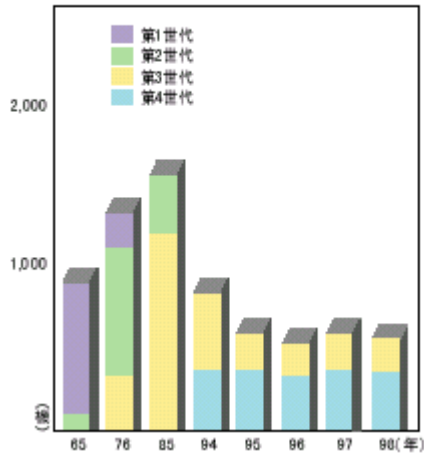


(注) 1 1976年：前大綱策定
 1985年：ゴルバチョフ政権誕生
 1995年：現防衛大綱策定
 2 1992年までは極東旧ソ連
 以下第1-9図～11図において同様

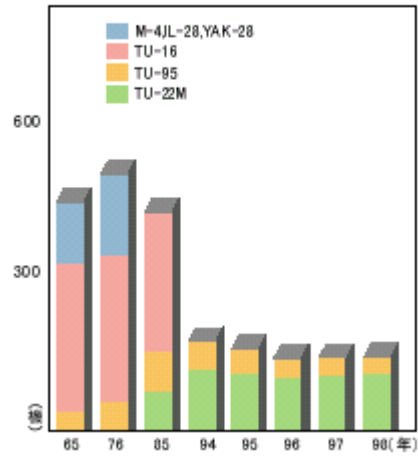
第1-9図 極東ロシア軍の海上兵力の推移



第1-10図 極東ロシア軍の航空兵力の推移(戦闘機)



第1-11図 極東ロシア軍の航空兵力の推移(爆撃機)



極東ロシア軍の将来像については、ロシア軍とロシア国内の流動的な情勢とあいまって明確でなく、引き続き注目していく必要がある。

4 中国

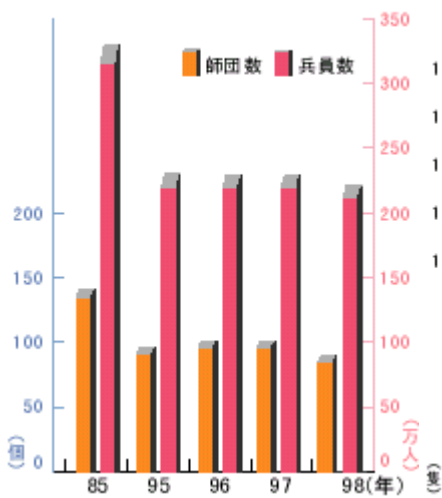
軍事力について、量から質への転換を企図している。軍事力の近代化は、中国が経済建設を当面の最重要課題としていることなどから、漸進的に進むものとみられるが、核戦力や海・空軍力の近代化の推進や海洋活動範囲の拡大などについて、今後とも注目していく必要がある。

第1-12図 中国軍の配置

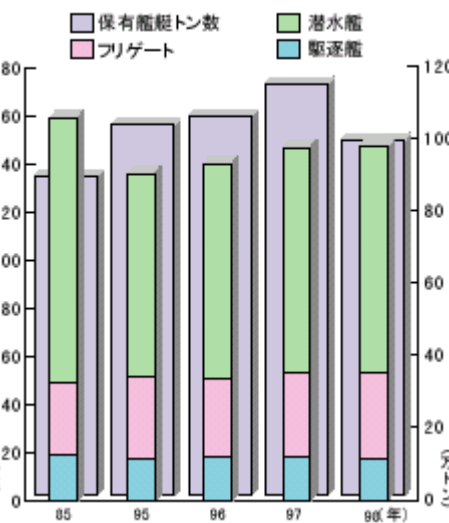


(注)陸軍と空軍の軍区は同一である。 ● 軍区司令部 ◉ 艦隊司令部

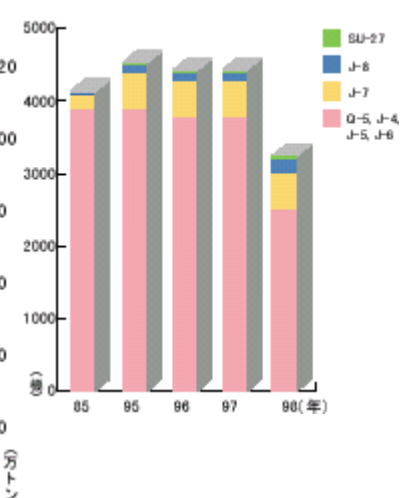
第1-13図 中国軍の陸上兵力の推移



第1-14図 中国軍の海上兵力の推移

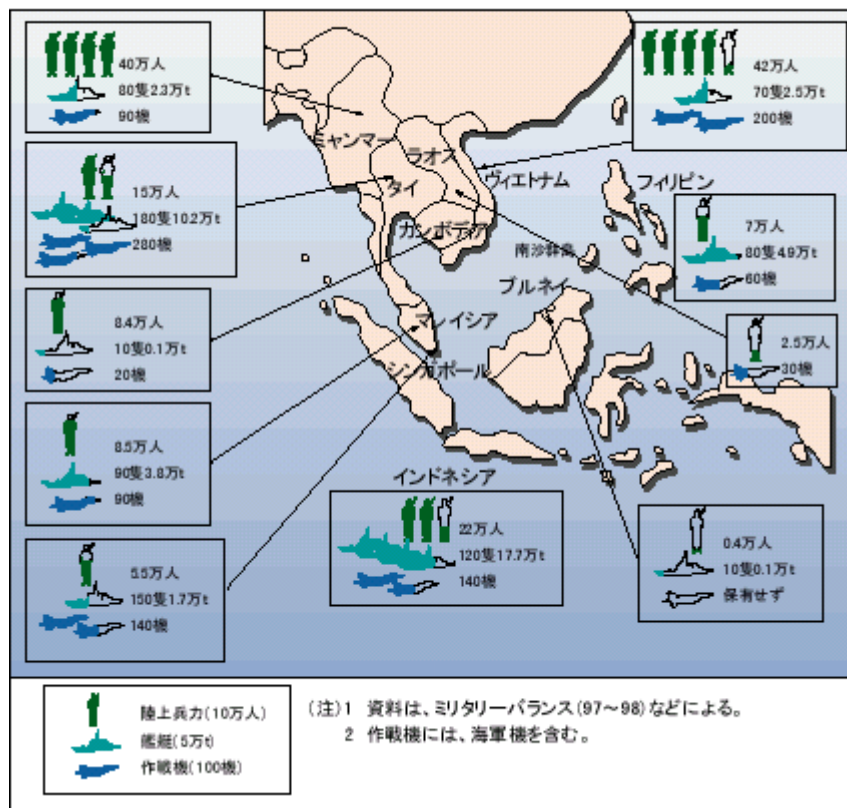


第1-15図 中国軍の戦闘機の推移



5 東南アジア

第1-16図 東南アジアにおける兵力状況(概数)



通貨・金融危機に見舞われ、軍事力の近代化に遅滞が見え始めている。インドネシアでは大規模な暴動・デモが発生し、本年5月、スハルト大統領が辞任した。

6 アジア太平洋地域の米軍

QDRにも明記されたように約十万人の兵力の維持を表明している。

7 各国の安定化努力

欧州における軍備管理・軍縮などの動きこそ見られないが、近年、二国間の軍事交流などの機会の増加や地域的な安全保障に関する多国間の対話の努力（ASEAN地域フォーラム（ARF）など）が行われている。